慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	近現代日本とイスラーム美術・建築 : その紹介者としての伊東忠太
Sub Title	Influence of Islamic art and architecture in modern Japan : the case of Chuta Ito
Author	鎌田, 由美子(Kamada Yumiko)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2022
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 人文科学 (The Hiyoshi review of the humanities). No.37 (2022.) ,p.99- 125
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10065043-20220630-0099

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

近現代日本とイスラーム美術・建築

――その紹介者としての伊東忠太――

鎌　田　由美子

1．はじめに

日本においては現在でも，イスラーム美術が一般の人びとに紹介される機会が限られている。欧米の規模の大きな美術館や博物館には，イスラーム美術の常設展示があるのに対し，日本には常設でイスラーム美術を紹介しているところが少ない。また，西洋美術や日本美術を紹介する書籍と比べると，イスラーム美術についての書籍はかなり少ない[(1)]。しかし，最近ではイスラームの文化や歴史が雑誌で特集され，その内容がのちに書籍化されるなど[(2)]，関心の高まりがうかがわれる。

また，近年ではイスラーム美術を専門的に紹介する特別展が開かれ，盛況を博している。2018年には『アラビアの道　サウジアラビア王国の至宝』（東京国立博物館），2019年には『トルコ至宝展　チューリップの宮殿

---

(1)　日本語で読める入門的書籍として，ジョナサン・ブルーム，シーラ・ブレア『イスラーム美術』（桝屋友子訳，岩波書店，2001），桝屋友子『イスラームの美術』（東京美術, 2009），小林一枝『「アラビアン・ナイト」の国の美術史』（八坂書房，2004），真道洋子『イスラームの美術工芸』（山川出版社，2004）がある。イスラーム建築については深見奈緒子『イスラーム建築の見かた』（東京堂出版，2003），写本については大川玲子『コーランの世界』（河出書房新社，2005）などのほか，杉村棟氏やヤマンラール水野美奈子氏の手がけた書籍などがある。

(2)　ペン編集部『アラブは，美しい。』（CCC メディアハウス，2020）や『イスラムとは何か。』（CCC メディアハウス，2013）など。

トプカプの美』（国立新美術館ほか），2021-22年にかけては『マレーシア・イスラーム美術館精選　イスラーム王朝とムスリムの世界』（東京国立博物館）が開催された。この『イスラーム王朝とムスリムの世界』の展覧会カタログには，東京国立博物館館長の挨拶文として「わが国においてイスラームの理解を促す上で，イスラーム文化圏全域に及ぶ展覧会が長らく待望されてきました。その意味で今回の展示は日本における展覧会史上きわめて価値があり，また有意義であると自負いたしております」とある[(3)]。

2021年の時点で，イスラーム美術の全体的な流れを紹介する入門的な特別展が開かれていることが，日本におけるイスラーム美術に対する馴染みの薄さの証左となっている。しかしながら，100年以上も前に，イスラーム美術と建築の重要性を認識し，日本人に紹介する意義を見出し，実際に展覧会を企画し，数多くの著作をなし，講演や講義を行い，さらにはイスラーム風建築を実作することで，日本人にイスラーム美術および建築を紹介した人物がいる。それが，東京帝国大学で建築史を教え，建築家としても活躍した伊東忠太（1867-1954）である。

伊東忠太については，さまざまな研究がなされてきた。しかし，イスラーム美術および建築の紹介者としての伊東忠太に焦点を当てた単独の研究は見当たらない[(4)]。本稿では，まず，伊東忠太へといたるイスラーム風建築の先駆者としてのジョサイア・コンドルに着目する。次に，中国からイ

---

(3)　実際には，イスラーム文化圏全域の美術を示す展覧会はこれが初めてではなく，2005年に世田谷美術館で開催された『イスラム美術展　宮殿とモスクの至宝』が，広大なイスラーム圏における美術の変遷を示した日本で最初の展覧会と考えられる。ただ，『イスラーム王朝とムスリムの世界』がウマイヤ朝からムガル朝まで王朝ごとに作品を展示したうえで，東南アジアや中国におけるイスラーム美術をも示す包括的なものであるのに対し，『イスラム美術展　宮殿とモスクの至宝』はテーマ別展示であり，ムガル朝や東南アジアなど扱われていない地域もある。

(4)　日本にイスラーム美術を学術的に紹介した最初の人物が伊東忠太であることは，すでに桝屋友子氏が指摘している。桝屋友子「日本とイスラーム美術」羽田正編『ユーラシアにおける文化の交流と転変』（東京大学東洋文化研究所，2007），97-104頁，特に101-102頁を参照。

ンド，シリア，トルコ，ヨーロッパへといたる３年にもおよぶ大旅行によって得た伊東のイスラーム美術・建築への理解がいかなるものだったかを探る。さらにイスラーム美術・建築の紹介者としての姿を追う。最後に，日本におけるイスラーム美術の受容プロセスに伊東の活動を位置付ける。

２．伊東忠太をめぐる研究

伊東忠太の研究対象は，日本建築から中国・インドを含む東洋建築におよび，そのなかにイスラーム建築も含まれる。建築史家として名高い伊東忠太は，大学教員として後進を育て，多くの建築作品を残し，研究と著述を熱心に行い[5]，建築物の保存などの公的な活動にも携わった。伊東についてはさまざまな著作・論考があるが，以下のものは特に重要と思われる。

伊東の活動を知るための基本的な文献として，晩年の伊東本人への聞き取りをもとにした，岸田日出刀『建築学者　伊東忠太』（乾元社，1945）がある。没後の1954年には，『建築史研究』17号（建築史研究会）で特集が組まれ，伊東の略歴や著作目録，建築作品年表が掲載され，その功績が称えられている。ここにおいてすでに，「日本に於いての唯一のイスラーム建築学者」（19頁）であったことが述べられている。

伊東忠太は，法隆寺の柱に見られる胴張にギリシアのエンタシスの影響を見出したことで知られる。しかし，それが彼の独創ではないことを指摘し，当時の学界状況を明らかにしたものに井上章一『法隆寺への精神史』（弘文堂，1994）がある。また，鈴木博之編著『伊東忠太を知っていますか』（王国社，2003）は，業績のみならず従来見落とされていた嗜好や性格にも光を当てたもので，伊東を理解するうえで重要である。『伊東忠太資料目録・解説　建築博物館開館記念所蔵資料展　拡張するアーカイブ

(5)　全６巻の著作集『伊東忠太建築文献』（龍吟社, 1936-1937）として，１巻『日本建築の研究　上』（1937），２巻『日本建築の研究　下』（1936），３巻『東洋建築の研究　上』（1936），４巻『東洋建築の研究　下』（1937），５巻『見学紀行』（1936），６巻『論叢・随想・漫筆』（1937）があるが，そこに収録されていないものも多い。

伊東忠太展』（日本建築学会，2003）は，伊東のフィールドノートの概要を紹介し，解説を加えたもので，貴重な資料となっている。最近の研究には，図案集である『文様集成』（建築学会，1911-1916）の編纂者および啓明会創立十年記念展覧会の委員長としての伊東忠太に着目することで，当時のペルシア観を探ろうとするザヘラ・モハッラミプール氏の研究がある[6]。

3．コンドルによるイスラーム風建築

伊東忠太はいくつかのイスラーム風の建築物を手がけたが，それは伊東が初めてではない。伊東の師である辰野金吾の師にあたる，ジョサイア・コンドル（1852-1920）が日本にイスラーム風建築をもたらした最初の人物である。すでに指摘されているように，コンドルの手になる鹿鳴館は，バルコニーなどがイスラーム風である（図１）。また上野博物館（図２）もインド・イスラーム風を取り入れており，永代橋あたりにあった開拓使物産売捌所（図３）は窓と内装がイスラーム風である[7]。

19世紀のヨーロッパでは，イスラーム風の建築物が席巻しており，建築分野のお雇い外国人であるコンドルがそれを持ち込むことに不思議はない。しかし，コンドルは安易にイスラーム風を摂取したのではなかった。彼は講演ではっきりと，「建築に東洋的な性質を与える形態を，インドまたはイスラーム建築に求めた。……これが，日本に擬イスラーム様式（pseudo-Saracenic style）を取り入れた動機である」とその意図を説明している[8]。

---

(6)　ザヘラ・モハッラミプール「「東洋」の一部としてのペルシア―『文様集成』の編纂と伊東忠太」『超域文化科学紀要』25（2020），133-152頁；同「戦前日本の美術界における「東洋」概念の拡張―黒板勝美のペルシア旅行と東京帝室博物館の古美術陳列」『日本中東学会年報』37-１（2021），33-67頁。

(7)　コンドルのイスラーム風建築については鈴木博之『ヴィクトリアン・ゴシックの崩壊』（中央公論美術出版，1996）所収の「ジョサイア・コンドルと日本」（95-153頁），鹿鳴館および上野博物館については小野木重勝『明治洋風宮廷建築』（相模書房，1983）の第４章を参照。コンドルの生涯については畠山けんじ『鹿鳴館を創った男』（河出書房新社，1998）が詳しい。

図１　鹿鳴館のバルコニー
明治16（1883）年　日本建築学会所蔵

図２　上野博物館　明治15（1882）年
小川一真『東京風景』(1911）より転載（部分）

図３　開拓使物産売捌所　明治14（1881）年
『コンドル博士遺作集』(1931）より転載（部分）

図４　岩崎久彌邸　明治29（1896）年
鈴木博之『明治の洋館100選』
（講談社，1992）より転載

この信念は揺らがなかったようで，のちに明治政府から距離をとり，個人の邸宅を手掛けるようになってから携わった岩崎久彌邸（図４）や，明治末期の岩崎彌之助高輪別邸の室内に，イスラームのモチーフを使用している[9]。

さらには，コンドルの弟子である辰野金吾が設計した国技館（1909年開設，図５）にも，インド・イスラーム風の要素が取り入れられていた[10]。

(8)「コンドル博士答辞」『建築雑誌』402（1920），276-279頁。
(9) 鈴木「ジョサイア・コンドルと日本」，114，130-131，136頁。

図５　国技館　明治42（1909）年開設
小川一真『東京風景』（1911）より転載（部分）

辰野の手がけた南海電鉄浜寺公園駅（堺市，1907年）も同様である[11]。浜寺公園駅以外は現存しないために想像しにくいが，明治の終わり頃には，コンドルによる鹿鳴館，上野博物館，開拓使物産売捌所，辰野による国技館という，誰もが目にすることのできた建築物にイスラーム風が取り入れられていたのである。

コンドルは，教育者としても大きな影響力を持っていた。彼は，工部大学校ののちに帝国大学工科大学（現在の東京大学工学部）でイスラーム圏を含む世界の建築様式を教えていた[12]。倉方俊輔氏は，コンドルがオーウェン・ジョーンズ（Owen Jones）の『装飾の文法（The Grammar of Ornament）』（1856）を参考書とする講義を行い，伊東が熱心にノートをとっていたことを明らかにしている[13]。伊東には，自分が大きな影響を受けた人物や著作について批判したり黙殺したりする傾向があることが指摘されており[14]，コンドルについても詳しく言及されていない。だが，伊東

⑽　藤森照信，山口晃『探検！東京国立博物館』，淡交社，2018，116-117頁。
⑾　鈴木博之『明治の洋館100選』講談社，1992，83，111頁。
⑿　長尾重武「伊東忠太小論―伝統と近代―」『日本建築の特質』（中央公論美術出版，1976），511-525頁，特に514頁を参照。
⒀　鈴木『伊東忠太を知っていますか』所収の倉方俊輔「ノートの落書き―コンドル，辰野金吾，伊東忠太」219-223頁を参照。

がイスラーム風建築を実作した背景として，コンドルによる世界の建築についての教育，およびコンドルによるイスラーム風の建築物を間近に観察できた環境を無視することはできないだろう。それに加えて決定的な影響を及ぼしたのが，３年に及ぶ中国・インド・シリア・トルコ旅行を通じて，実際にイスラーム圏の美術と建築に触れたことである。

４．伊東忠太の中国・インド・シリア・トルコ旅行

伊東忠太は1902年３月から1905年６月まで，中国から東南アジアを経てインド，トルコ，エジプト，イスラエル，ヨルダン，レバノン，シリアなどを見てまわる大旅行に出かけ，ヨーロッパ各地とニューヨークを経由して帰国した[15]。法隆寺にヘレニズムの影響を見ていた伊東は，推古朝期にはヘレニズムが流入していたと考えており，この大旅行で中国の雲崗石窟（北魏時代）にヘレニズムの要素を見出すことでこれを実証した[16]。これに続いてインドからトルコまで広範囲にわたって調査の旅を続け，膨大な記録を取った。晩年に伊東はこの旅を回顧して，インドに立派なイスラーム建築が数多くあって驚いたこと[17]，イスラーム建築とインド建築の関係を知ることを目標としてトルコへと旅したこと[18]，タージ・マハルの美に打たれハギア・ソフィアに感嘆したが，パルテノン神殿を礼賛する気になれなかったこと[19]に言及している。この大旅行によって伊東は，学術研究のために長期にわたり現地を旅してイスラームの建築と美術に触れた初めての日本人となったのである。

---

⑭　鈴木『伊東忠太を知っていますか』32頁；井上『法隆寺への精神史』29頁。

⑮　東京帝国大学の助教授だった伊東は，教授になるために必須だったヨーロッパ留学の代わりに，この長期にわたる旅行を敢行した。鈴木『伊東忠太を知っていますか』22頁。

⑯　井上『法隆寺への精神史』137-145頁。

⑰　岸田日出刀『建築学者　伊東忠太』乾元社，1945，198頁。

⑱　岸田『建築学者　伊東忠太』204頁。

⑲　岸田『建築学者　伊東忠太』208頁。

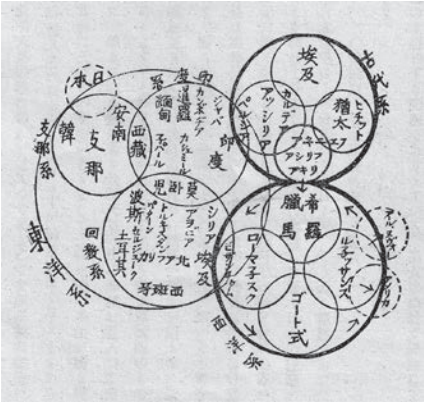

図6　『建築雑誌』265（1909），20頁より転載

帰国後はすぐに精力的にイスラーム美術・建築を紹介した。帰国翌年の1906年には「清真寺（支那に於ける回教寺院）」（『歴史地理』8（12），1906，8-16頁）を発表し，「回教建築が，建築として実に絶倫であることを吹聴し，併せて世人に斯の如き絶倫なる美建築の研究の一日も忽（ゆるがせ）にすべからざることを警告して置きたいのである」（9頁）と述べてイスラーム建築を高く評価し，その研究の必要性を説いている[20]。

1909年に発表した「建築進化の原則より見たる我邦建築の前途」（『建築雑誌』265，4-32頁）では，世界建築の見取り図（図6）を示し，ここで東洋系のなかに「回教系」を位置付けている。伊東は学生だった頃，ジェームズ・ファーガソン（James Fergusson）やバニスター・フレッチャー（Banister Fletcher）による建築史の概説書に学んでいるが[21]，そこに見ら

---

(20)　その後，1910年に広東を調査した伊東は1917年，「広東に於ける回教建築」を3回にわたり『建築雑誌』（363，364，370）に発表し，広東での調査で最も興味がひかれたのがイスラームの遺跡であったと緒言に述べている。これは『東洋建築の研究　上』1936，549-574頁に収録されている。

(21)　James Fergusson, *The Illustrated Handbook of Architecture*, London, 1855; Banister Fletcher, *A History of Architecture on the Comparative Method*, London, 1896. 鈴木『伊東忠太を知っていますか』20頁。

れる東洋建築に見るべきものはないという態度に反発し，それが伊東の東洋建築研究の根底にあった[22]。この図には，自らの見学紀行をもとに，世界建築を系統立てようと奮闘する様子が認められる。

5．伊東忠太のイスラーム建築・美術の理解

100年以上も前ではあるが，伊東のイスラーム建築・美術の理解は，現在からみてもそれほど不確かではない。むしろ，その特徴を的確にとらえているように思われる。たとえば，現在でもイスラーム美術といえば具象的な表現が一切ないかのように誤解されることがあるが，伊東は1906年の講演「東洋建築ノ系統及其美的価値」(『日本美術協会報告　第一次』1（185）1906，23-41頁）において，「一般に世の中で信じて居る所では回教では動物は使はない，其の代はりに幾何学的紋様や唐草を振廻はすことは非常に巧みである，と云ふのですが，アラビアで幾何学的紋様の熟達したのは遥かに後世で，始はやはり動物も盛に用ゐて居った」(35-36頁）と，具象的な表現の存在に言及している[23]。

また，「ビザンチンと薩珊（ササン）との関係は面白い研究問題で他日改めて御話致しますが，要するに両方共にアラビアの祖先です，最古のアラビア模様はドーしても東羅馬（ローマ）或は薩珊と区別がつかない位で，動物には獅子，鸚鵡，グリフィン，などが沢山に使用されて居ます，このアラビアが追ひ追ひ変化して各地方に入て各種の発達をしました，支那に来たのもその一派です」(36頁）と述べ，イスラーム美術の二大源流としてビザンティン美術

---

(22)　井上『法隆寺への精神史』66-68頁。伊東は1906年の「東洋建築の系統及其の美的価値」『早稲田文学』（2（3），70-80頁）の77頁において，ヨーロッパ人が東洋の建築を「ノンヒストリカル」だとして度外視していることを批判している。そして，世界的な観点から東洋の芸術を観察し，系統立て，東西の関係を明らかにすることが急務であると述べている。

(23)　イスラーム美術では，宗教にかかわる分野（たとえばモスクやコーラン写本など）には生き物の具象的な表現は見られないが，世俗分野（たとえば宮殿や物語写本など）においては生き物の豊かな表現が見られる。

とサーサーン朝美術を挙げているが，これは現在のイスラーム美術史における定説である。

さらに，イスラーム美術・建築の性格についても，「アラビヤは回教であって天帝一人を拝むが偶像は拝まない，故に色々の彫刻をする必要はない，それ故に彫刻は発達はしないで模様画の方が発達して居る，其建築の性質にしても印度教のやうな幽晦なものでなく，極めて快活なものである」（39頁）と的確にとらえている。伊東忠太が本質を見抜くことに長けていたことは，セルジュークの芸術について「土耳古（トルコ）は波斯（ペルシア）を手本として居るから多量に波斯的原素を含んで居る」（37頁）と述べていることにも明らかである。

伊東はこの講演で，世界の建築を「①エジプトおよび西方アジア系統 ②ギリシア・ローマの世界に属する系統 ③回教系統それに属する系統（アラビア，トルコなど）④インド系統 ⑤支那系統（日本及朝鮮などがこれに属する）」（37頁）の５つに分類している。このなかで，イスラーム建築を高く評価していたこと，またイスラーム建築・美術を研究する必要性を認識していたことは，1908年の「アラビヤ藝術の起源に就て」（『日本美術』113号，１－８頁）に，以下のように明示されている（下線は筆者による）[24]。

「従来回教建築は欧米建築家の間に重を置かれざりしも予は東洋に於て最も趣味あるものはアラビヤ建築なりと信ず。慥（たしか）にアラビヤ藝術は藝術として大なる値を有す。其建築に於て最も著しきは形の変化に富める事にして即ちドーム及塔の配合の如き之なり，是れ平沙数百里の間，一の樹林，山岳なき沙漠にありては建造物の輪廓線に自ら山岳の

(24) ここで伊東は，「アラビヤ藝術」をイスラーム美術と同じ意味合いで用いている。そのことは，「アラビア藝術の起源に就て」（『史学雑誌』20（１），1909，12-44頁）の12頁に「アラビア藝術とは英語のSaracenic Art又はMuhammadan Artと同意義で即ち又回教藝術と訳さるべきものである」と明記されている。

如く樹林の如き変化あることを要求すればならん。其他装飾に関しては色彩の濃厚にして華麗なる，線條の縦横にして端睨すべからざる，世已(すで)に定評あり。……アラビヤの藝術は善く東洋的の趣味を発揮したるものなり，是故に西亜諸国に，印度に，中央亜細亜に，往く處に其地方従来の藝術と融和して円満なる発展を遂げたるなり。アラビヤ藝術は支那系統の藝術に対しても亦た均しく融和の力を示せり。日本建築の細部の手法に於て，殊にその繪様に於て，吾人は不思議にもアラビア的線條を見るに非ざる乎，懸魚，蟆股，拳鼻，等孰(いず)れかアラビヤ的にあらざるものぞ，欧米の建築史家がアラビヤ建築を以て非歴史的なりとし，之を度外視するは我関せず焉(いずくんぞ)，我は進んでアラビヤ藝術を歓迎し，大に之を研究せんと欲するものなり。」（7－8頁）

この記述からは，各地域にもともとあった美術伝統とイスラームの要素が融合することによって，その土地に固有のイスラーム美術の様式を作り上げていくという，イスラーム美術特有の発展プロセス[25]を，伊東が的確に把握していたことも分かる。

1909年に発表された「アラビア藝術の起源に就て」（『史学雑誌』20（1），1909，12-44頁）も，伊東のイスラーム美術・建築の理解を知るうえで興味深い。このなかで伊東は，「殊に四角な壁の上に丸いドームを載せる手法，即ち四角から丸に移る間の連絡の手法などは実に工夫を盡(つく)したもので他の建築には決して類例の無い處である」と，イスラーム建築の重要な達成であるムカルナス（スタラクタイト）に言及する。続けて「ミナレットの輪廓の奇巧なることも亦慥(たし)かに他に匹儔(ひっちゅう)を見ることが出来ない，又このドームとミナレットの配合の妙も恐くはゴシック最美の実例よりも優ッて居る」（32-33頁）として，イスラーム建築のドームとミナレットの組み合わせをヨーロッパ建築よりも優れたものと評価している。また，偶像崇拝

[25] ジョナサン・ブルーム，シーラ・ブレア『イスラーム美術』137頁；桝屋友子『イスラームの美術』10-11頁。

の禁止と装飾の関係についても，「回教の教義では宇宙間唯一の天帝がある斗(ばか)りで雑多な神は無い，神は無形であるが故に偶像を作らない，信者はモスクの中で只だメッカに向つて礼拝するのみである，故に堂内に神像も神壇も神祠もない，堂内を装飾すべき設備は何も無い，そこで壁面を飽くまで装飾する必要が生じて来る，アラビア装飾紋様の発達の一大源因は亦こゝにも存するのである」（34頁）と，的を射た説明をしている。

1919年の「印度建築と回教建築との交渉」（『国華』30-４，121-130頁および『国華』30-５，185-194頁）では[26]，ムガル朝などイスラーム時代の建築を，純然たるインド建築ととらえ，それをイスラーム建築と呼ぶことを否定するハヴェル（E.B. Havell）の説に疑問を呈し，さまざまな事例を挙げて，「印度回教式建築なるものは，回教藝術の感化を受けたる印度の建築と解するのが最穏健である」（194頁）と結論付けている。その論証は現在読んでも妥当と言えるだろう。

伊東忠太は，イスラーム美術・建築についての専門的な著述に加え，それについての啓蒙的な仕事にも力を注いだが，ここに見たように，３年におよぶ現地調査を経て，現在の研究に照らしても妥当なイスラーム美術・建築の理解をしていたことが分かる。もちろん，細かいところには不正確なところもある[27]。しかし，イスラーム美術・建築が，当時の日本では前人未踏の研究分野であり，欧米の研究者の間にあっても十分には研究されていなかったことをふまえると，伊東忠太の本質を把握する力量は驚異的だといえるだろう。

---

(26) この論文は，『建築雑誌』397（1920），19-36頁および『東洋建築の研究　下』289-317頁に転載されている。

(27) たとえば，クルアーン（コーラン）を「クール・アーン」と表記するというように，用語に不正確なところがある（伊東「回教建築」『東洋建築の研究下』420頁）。そのほか，イスラーム建築に影響を与えたものとして，ビザンティン建築とサーサーン建築に加えて，コプト建築まで挙げているが（同，421頁），これは現在では一般的でない。またイスラーム建築は「生れながらにして石造」（伊東「サラセン建築」『世界美術全集』16巻，1928，14頁）とするが，場所によっては煉瓦造りであり，正確ではない。

6．イスラーム美術・建築の紹介者としての伊東忠太

日本でもイスラーム美術・建築を研究するべきであるという信念をもつ伊東は，その紹介にも熱心に取り組んだ。早稲田大学で1931年に行った「サラセン建築」の講義内容は，1937年の『東洋建築の研究　下』（417-453頁）に「回教建築」として収録されており[28]，イスラーム建築についての稀少な概説として長く参照されたと思われる。研究者を対象とする著述と，大学での講義を除くと，伊東忠太によりイスラーム美術・建築の紹介は，イスラーム風建築の実作，展覧会の企画，『文様集成』や美術全集などの出版事業の３つに分類できるだろう。

6-1　イスラーム風の建築作品

伊東がかかわったイスラーム風建築として興味深いのが，大谷光瑞（1876-1948）の別荘として使用された1909年の二楽荘（神戸市，のち焼失，図７）である。この建物と庭園はムガル風で，噴水のあるアラビア室や，ムガル朝様式を模したとされるインド室，古代エジプトのモチーフを取り入れたエジプト室などがあった。さらに二楽荘の上方にはアグラ城を模したとされる住居「含秀居」があった[29]。

二楽荘建設の経緯について伊東は「建築のプラン及その各室の様式の変化は，伯が特殊の要求に出たるものなり。外形を印度サラセン様とせるも，

---

(28)　この「回教建築」が，1931年の早稲田大学での建築講義をもとにしていることは，『建築史研究』17（1954），10頁に記載されている。「回教建築」には，「回教建築は建築史上に於いては東西建築の連鎖であると云ふ極めて重要なる位置にありながら，且つ又其の世界に及ぼせる影響の極めて広範であるにもかゝわらず，欧米の文化と縁が遠いと云ふ誤解から，今日まで欧州の諸建築に比しては極めて不充分なる研究しかなされてゐないのである。従つて多くの未解決の部分を残してゐるので，それ等の調査研究は我が建築史界に残されたる広大無辺の分野である」（453頁）とあり，伊東のイスラーム建築への想いの深さがうかがわれる。

(29)　和田秀寿編著『二楽荘史談』（国書刊行会，2014）の第２章を参照。

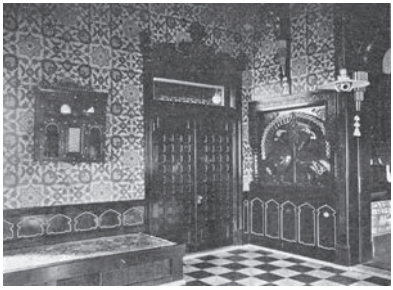

図７　二楽荘外観およびアラビア室　明治42（1909）年
『建築工藝叢誌』20（1913），２，６頁より転載

伯の註文に出たるものなり。但細部の手法，材料構造は主として鵜飼氏の意匠に成り，施工の全責任は鵜飼氏に帰せり」[30]と述べ，イスラーム風にするという全体のプランは大谷光瑞のものであり，設計したのは本願寺技師の鵜飼長三郎だったと明記している。さらに，インド室やエジプト室が，その土地の様式で装飾されているにもかかわらず，現地にいるような気にならないのは，助言者である自分にも責任があると述べている[31]。伊東は３年にわたる現地旅行で，写真やスケッチ，観光葉書などの大量の資料を持ち帰っていた。おそらく伊東は助言者としてそうした資料を貸し与えたのだろう。

伊東忠太は1903年に大谷探検隊の支隊と中国で偶然出会い，帰国後，大谷光瑞と知遇を得る。本願寺を率いる日本人ならではの西域調査を目指す大谷光瑞と，日本人ゆえに東洋からの視点をもってインドやイスラーム圏の美術・建築の研究を行おうとする伊東は意気投合したに違いない。大谷光瑞は，西域調査の準備のためにイギリスを中心としてヨーロッパ各地に滞在し，さらにはトルコなどにも旅している。ブライトンにも長く滞在しており[32]，そこでインド・イスラーム風の宮殿ロイヤル・パビリオンを目

---

(30)　伊東忠太「二楽荘の建築」『建築工芸叢誌』20（1913），１頁。
(31)　同上。
(32)　大谷光瑞は，カイロでイスラーム建築を見学し，ロンドンではサウス・ケン

図８　本願寺伝道院　明治45（1912）年
倉方俊輔『京都　近現代建築ものがたり』（平凡社，2021，撮影：倉方俊輔）より転載

にしていたはずである。また，ロンドンではレイトン・ハウスのような，イスラーム趣味の邸宅も見ていただろう。

この二楽荘は，イスラーム風の建築，庭園，内装を持つ珍しいものとして注目を集め，新聞記事にもなっている。1912年11月２日，３日の「二楽荘公開・中亜探検発掘物展観」（無料）に合計３万人以上が見物に来たことからも関心の高さがうかがわれる。その後は限定無料公開のほか，有料公開もされたという[33]。日本ではあまり知られていないイスラーム建築・美術を人びとに印象付ける役割を果たしただろう。それはイスラーム美術・建築を高く評価し，その研究の必要性を唱える伊東にとっても喜ばしいことであったはずである。

伊東自身も大谷光瑞を注文主としてイスラーム風の建築作品をつくっている。それが1912年の真言信徒生命保険株式会社（京都市，本願寺伝道院として現存，図８）で，19世紀後期にイギリスで流行したクイーン・アン

ジントン博物館やさまざまな建築物を見学している。大谷光瑞のヨーロッパ滞在については，片山章雄編『欧亜往還　西本願寺留学生・大谷探検隊の100年』（大谷記念館，2004）を参照。

(33)　和田『二楽荘史談』，90-92，116-123頁。

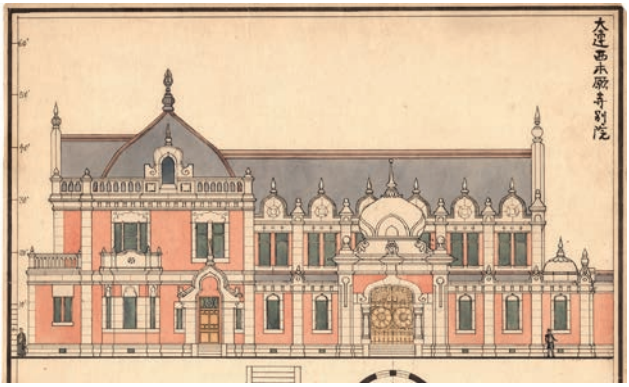

図９　西本願寺大連別院　計画図　明治40（1907）年
東京大学大学院工学系研究科建築学専攻所蔵

様式をもとに，イスラーム風の窓とドームを取り入れたものである[34]。これに先立ち1907年にはすでに大谷光瑞の依頼で西本願寺大連別院の図面を作成している（図９）。これもクイーン・アン様式にイスラーム風のアーチとドームを組み合わせたものだったが，実現には至らず，その理由として門徒に反対された可能性が指摘されている[35]。1912年には，イスラーム風のアーチを取り入れた大阪市公会堂を計画するが，これも実現していない[36]。コンドルによるイスラーム風建築が，明治政府には好意的に受け取られなかったように，伊東によるイスラーム風建築もまた，イスラーム美術・建築に触れたことがない多くの日本人には奇異に映り，本願寺関連の建物や公的建物としては受け入れられなかったのかもしれない。1927年，コンドルの教えを受けた曾禰達蔵が率いる建築事務所が設計した小笠原長幹邸には，イスラーム風の装飾デザインが施された喫煙室があるが[37]，こうしたイスラーム趣味は，個人的には好まれることがあっても，一般化は

⒁　倉方俊輔『京都　近現代建築ものがたり』平凡社，2021，49-51頁。
⒂　三谷真澄『大谷光瑞の構想と居住空間』法蔵館，2020，33，104-105頁。
⒃　鈴木『伊東忠太を知っていますか』所収の倉方俊輔「伊東忠太の設計思想―妖怪としての建築」85-136頁，特に112-113頁。
⒄　内田青蔵，小野吉彦『お屋敷拝見』河出書房新社，2017，62-69頁。

しなかったのだろう。

6－2　展覧会の企画

伊東忠太は，人びとを啓蒙するためにイスラーム美術・建築を展示する機会を作ってきた。ザヘラ・モハッラミプール氏が明らかにしたように，大旅行から帰国後の1907年に辰野金吾の提唱で開催された工科大学建築科第二回展覧会では，伊東忠太がトルコ，エジプト，インドなどから持ち帰ったペルシアの筆箱やムスリム用の念珠，トルコの銅盂（はち）とパイプと刺繍，女性が外出時に顔を覆う布などが展示された[38]。こうした小規模な展覧会は，学生たちを啓蒙するために折に触れて開かれていたかもしれない。

一方，大規模なものとしては，1928年に開催された，啓明会創立十年記念展覧会がある。この展覧会は，琉球，朝鮮，波斯（ペルシア），中央亜細亜の４部構成で，日本国内のコレクターから借りた3000点におよぶ美術工芸品や書籍を展示するもので，伊東忠太が委員長を務めた[39]。

この展覧会にともなう講演をもとにした「東洋芸術の系統」[40]からは，当時の伊東のイスラーム美術観を知ることができる。伊東は，東洋芸術の三大系統として西方アジア，インド，中国を挙げ[41]，イスラーム美術については，「これは藝術の力が強かったのと，地理と歴史の関係から，理想的に四方に拡がった」[42]とする。なかでもイスラーム時代のペルシア美術を高く評価し，「回教ペルシャ，こゝには極めて優秀なものが多いのであ

---

(38)　ザヘラ・モハッラミプール「「東洋」の一部としてのペルシア」140-141頁；「工科大学建築科第二回展覧会（東洋藝術の部）」『建築雑誌』245（1907），278-289頁，特に288頁。

(39)　この展覧会のカタログが『財団法人啓明会創立十年記念展覧会図録』（巧藝社，1928）である。

(40)　伊東忠太「東洋芸術の系統」『啓明会創立十年記念講演集』啓明会事務所，1928，５-38頁。この原稿は『東洋建築の研究　下』３-28頁にも収録されている。

(41)　伊東「東洋芸術の系統」，11-12頁。

(42)　伊東「東洋芸術の系統」，24頁。

ります。ペルシャ藝術品は日本にも若干あるとは聞いて居りましたが，斯んな優秀なものが沢山あるとは私は想像して居りませんでした」[43]，「先づ第一にペルシャ品，実に世界にこんな結構な美しいものがあらうかと思ふ位」[44]と述べている。

さらに，トルコなど，イラン以外の地で作られたものでもペルシアの影響を受けたものであればペルシアに分類したことについて，「ペルシャの感化は随分広いのでありますから，波斯以外の地方の作品でもその性質がペルシャ式であればペルシャの部に出陳したのであります，西トルケスタンの小画数点もこの意味に於てペルシャの部に列なって居ります」[45]と説明している。現在のイスラーム美術史では，イラン以外の地域において，ペルシア美術の影響を受け，それを手本として生み出された美術は，ペルシア化された美術（Persianate art）と認識されているが[46]，伊東も同じように考えており，その的確な把握に驚かされる。伊東は続けて，欧米ばかりを見るのではなく，東洋の優れた美術品に学ぶ必要があることを以下のように述べている。

> 「此の如く東洋に優秀なる藝術が沢山あるのに，我々は何を苦んで日本の藝術が振はないといふことを憂へる必要がありますか。ヨーロッパの新しい藝術ばかりを追ひかけるのが能ではない。静かに東洋の全局面を見渡せば，とても学びきれないほど多量の資料が遺って居る。それを棄てゝヨーロッパ，アメリカの最近の藝術のみに没頭する――ヨーロッパ，アメリカの藝術を尊重することは勿論悪くないが，併な

---

(43) 伊東「東洋芸術の系統」，26-27頁。

(44) 伊東「東洋芸術の系統」，35頁。

(45) 伊東「東洋芸術の系統」，27頁。

(46) たとえば，イスラーム時代のイランの影響を強く受けたデカンの美術はペルシア化された美術と考えられている。これについてはKeelan Overton, *Iran and the Deccan: Persianate Art, Culture, and Talent in Circulation, 1400–1700*, Indiana University Press, 2020を参照。

がら一面に於て東洋に斯ういふ立派な古代藝術があるのを棄てゝ顧みないといふことはいかにも残念である。作家の立場から見れば，尚更これが好い参考資料になるだらうと思ひます」[47]

このように伊東は，建築を含む日本の芸術は，イスラーム圏を含む東洋の芸術から学ぶべきであるという確信をもっていた。それこそが，以下に述べる『文様集成』や『世界美術全集』などの出版事業にたずさわった動機であろう。

6－3　『文様集成』および『世界美術全集』の出版事業

1911年に建築学会から全61冊の文様図案集『文様集成』が出版された。これを強力に推し進めたのが伊東忠太だった[48]。これに先立ち伊東は「天平時代の装飾模様に就て」(『建築雑誌』164 (1900), 225-251頁，のちに『日本建築の研究　下』に収録，ここでは「模様」が「文様」に変更されている）において，日本における文様研究の必要性を以下のように述べている。

「模様の一点に於ては殆んど日本は万国に冠たるものであると云ふことは，恐らく世界の定論であらうと思ひます。然るに，日本特有の藝術でありながら未だ我邦に此模様に就て説を唱へた人のあることを聞かないやうであります，又秩序的に此模様を分類し蒐集した人のあるとも聞かないのであります。此れは日本の藝術界に於ける一大欠点であらうと考へます。御承知の通り，欧米諸国に於ては模様のことには大に重きを置きまして，是に対する所の立派な論説などが沢山あります，又模様を秩序的に集めた本も沢山出来て居ります。日本に於ても此模様の研究はどうしても必要であらうと思ひます。」(225頁)

---

(47)　伊東「東洋芸術の系統」，36-37頁。

(48)　『文様集成』の刊行については角田真弓『明治期建築学史』（中央公論美術出版，2019），237-241頁を参照。

ここでの欧米での論説として想定されているのは，先述のオーウェン・ジョーンズによる『装飾の文法』（1856年）に代表される，装飾文様に関する数多くの書籍だろう。伊東は，文様図案集を手がける際，重要な役割を果たすのが，イスラームの装飾文様だと考えていた。1908年の「アラビヤ藝術の起源に就て」（『日本美術』113，1－8頁）では，「アラビヤの藝術は装飾の方面即ち色彩と模様に於て非常なる発達をなせり」（6頁）とイスラーム装飾を高く評価し，さらに，「アラビヤ模様中最も広く世界に弘布せるは動物，唐草，及幾何学的紋様なり，其他アラビヤ文字を装飾に適用するの法あり。今日欧米の装飾模様の起源は殆んど東洋に在りと云ふも過言にあらず」（6頁）と述べて，イスラーム装飾の強い影響力にも言及している。

こうした考えを持つ伊東に主導された『文様集成』は，イスラームを含む東洋を中心とした広範な図案集となっている。出版後は，建築分野のみならず美術工芸方面からも高い評価を受け，1923年には吉川弘文館より再刊され，図案集として最も権威のあるものとされている[49]。『文様集成』は，イスラームの文様を建築や美術工芸の専門家に紹介するものであったが，伊東はこれに飽き足らず，イスラーム美術・建築を広く一般の人びとに紹介する仕事にも携わった。それが平凡社からの『世界美術全集』の出版（1927-1930年，全36巻）で，これは日本で出版された最初の美術全集であった。伊東は，この全集にかかわった多くの専門家の一人として，インドやイスラームに関連する巻に図版を提供し，解説を書いている[50]。この『世界美術全集』は一般家庭で購入されることを想定して出版されたもので，実際に好調な売上を記録した[51]。その後も，『建築の学と芸』（三笠書房，1942）でインドのイスラーム建築を紹介するなど[52]，伊東は，イス

(49) 角田『明治期建築学史』241頁。

(50) 4巻，10巻，12巻，13巻，14巻，15巻，16巻，19巻，20巻，21巻，23巻，24巻，25巻および別巻の9巻，11巻。16巻に伊東が書いた「サラセン建築」（12-15頁）は，イスラーム建築についての簡潔な紹介となっている。

(51) 日本における美術全集の刊行については太田智己『社会とつながる美術史

ラームの美術・建築をひろく一般の日本人に紹介する仕事にも貢献したのである。

7．日本におけるイスラーム美術の受容

これまで見てきた伊東によるイスラーム美術・建築の紹介を，日本におけるイスラーム美術受容のなかに位置付けるとどのようになるだろうか。すでに明らかにされているように，日本には貿易や外交を通じて古くからイスラーム美術品が伝わっており，江戸時代にはオランダ東インド会社によって，さまざまなイスラーム美術品がもたらされた[53]。インドやペルシアの錦は茶道で用いられ，絨毯は京都祇園祭の山鉾の飾りに転用されるなど，日本独自の文脈で使われた。しかしながら，当時の人びとの多くは，それらがイスラーム圏でつくられたものとは認識していなかった[54]。

その後，明治以降になるとイスラーム美術品を蒐集したり，愛蔵する人びとが出てくる。紙幅の都合で詳述し得ないが，明治期から昭和期にいたる，そうした人びとを概観すると，織物産業関係者，政治家および実業家，芸術家（画家，工芸家，文学者など），学者に大別できるだろう。例をあげると，川島織物などの京都の織物産業は，古くからイスラーム圏のもの

学』（吉川弘文館，2015）および島本浣『日仏「美術全集」史』（三元社，2016）第二部が詳しい。

(52) ここでは「世界最美の建築―タージ・マハール」など，いくつかのイスラーム建築が紹介されている。また，アーマダバードのシディ・サイイド・モスクの窓の装飾を「その図案の巧妙にして流暢艶麗なることは他に比を見ない」（171頁）と高く評価している。

(53) 桝屋友子「日本とイスラーム美術」；杉田英明『日本人の中東発見』東京大学出版会，1995。

(54) 詳しくは鎌田由美子『絨毯が結ぶ世界―京都祇園祭インド絨毯への道』（名古屋大学出版会，2016）を参照。イスラーム圏の工芸品が江戸時代の美術や工芸に与えた影響については，同書，360－362頁および鎌田由美子「福澤諭吉旧蔵の硯箱に見られるメダイヨン文と異国趣味―玉楮象谷と藤川蘭斎の蒟醤をめぐって」小林頼子先生退職記念論文集刊行会編『移ろう形象と越境する芸術』八坂書房，2019，115-141頁。

を含む布を参考資料として集めている。同じ理由で鐘紡もイスラーム圏の織物を集めた。また，貴族院議員を務め美術愛好家としても知られる細川護立は，早くからイスラーム美術に関心を持ち，ヨーロッパでイスラーム美術品を購入している。イスラーム圏の美術品に魅了された芸術家は多く，画家の児島虎次郎がヨーロッパで買い集めたものが今も大原美術館に残る。岡田三郎助もイスラームの布類を蒐集した。ほかにも小出楢重をはじめ，イスラーム圏の布や絨毯を絵画に取り込む者もいた[55]。安井曾太郎の作品にもシンドの刺繍布が描かれている[56]。昭和半ばにはペルシア陶器が画家たちの間で関心を呼び，頻繁に描かれるようになる[57]。濱田庄司や芹沢銈介などのように，インスピレーション源としてイスラームの美術工芸品を集めた工芸家もいた[58]。文学者では，川端康成の愛蔵品にイスラーム圏でつくられた箱がある[59]。そのほか，柳宗悦のように，イスラーム圏の染織品に感銘を受けた学者もいた[60]。

しかし，伊東忠太の登場を見るまで，イスラーム美術・建築が多くの人びとに書籍や展覧会のかたちで紹介されることはなかった。そのため，伊東のかかわった啓明会創立十年記念展覧会や，『文様集成』および『世界美術全集』の刊行，イスラーム風建築の実作は，人びとを啓蒙するうえで大きなインパクトを与えたはずである。イスラームに関する啓蒙書として最初期のものとされているのが1939年の笠間杲雄『回教徒』（岩波新書）

---

(55) 東京国立近代美術館『ぬぐ絵画』2011，182-191頁。

(56) 1926年の「画室」と題する作品。『ぬぐ絵画』，171頁。

(57) 詳しくは，神田惟「一九五〇年代初頭に始まる「ペルシャ」陶器画の制作についての一考察―画家たちは何を「ペルシャ」陶器と認識していたのか」『美術史論叢』37（2021），27-42頁を参照。

(58) 鎌田由美子「柳宗悦の自然観と絨毯―日本における遊牧民絨毯の受容とその背景」神崎忠昭・野元晋編『自然を前にした人間の哲学』(慶應義塾大学出版会，2020)，241-267頁，特に258-260頁を参照。

(59) 川端香男里，東山すみ『知識も理屈もなく，私はただ見てゐる。』出版社不明，2011，112頁，図81。ここでは「草花模様文房具箱，トルコ」と紹介されているが，インドのものかと思われる。

(60) 鎌田「柳宗悦の自然観と絨毯」，251-257頁。

や1942年の大川周明『回教概論』（慶應書房）であることを考慮すると，伊東がいかに先駆的であったかが分かる。

しかし，伊東によるイスラーム美術・建築の紹介事業は，しばらく後継をみなかったようで，イスラーム美術や建築を紹介する本格的な展覧会や書籍は見当たらない[61]。戦後の美術全集に着目すると，1954年の『世界美術全集』（平凡社）[62]，1959年の『世界名画全集』（平凡社）[63]，1962年の『世界美術全集』（角川書店）[64]にイスラームを扱った巻がある。執筆者は西アジアの考古学者や歴史学者，仏教美術やインド美術などの研究者，建築史家，工芸史家などであった。1965年に出された『世界美術大系』（講談社）の別巻３「ペルシア美術」ではイスラーム時代の美術・建築が紹介されているが，執筆者はイスラーム美術の専門家ではない。これは，1966年の『世界美術』（講談社）の「イスラム」の巻においても同様である。1965-1971年の『世界の美術館』（講談社）では，大英博物館やボストン美術館，

⑹ 本稿を書き終えた後，1920年代に国内の美術商が企画した美術展および1939－1940年の回教圏展覧会（大日本回教協会主催）についての興味深い論文が出版された。それらについては小野亮介・海野典子編『近代日本と中東・イスラーム圏―ヒト・モノ・情報の交錯から見る―』（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所，2022）所収のザヘラ・モハッラミプール「1920年代日本の美術商とペルシア美術工芸品の展覧会」および重親知左子「「回教圏展覧会」再考―『記録　回教圏展覧会』を中心に―」を参照。『記録　回教圏展覧会』（大日本回教協会，1940）には出展されたものの図版が掲載されており，そこには啓明会創立十年記念展覧会に出展されたペルシアの染織品や工芸品なども見られ，啓明会創立十年記念展覧会の影響の強さがうかがわれる。

⑹ 10巻「サーサーン・イーラーン・イスラーム」。イスラーム時代の建築を藤島亥治郎と村田治郎，装飾文様を堀内清治，写本芸術を羽田明，絵画を上野照夫（インド美術が専門），織物を太田英蔵，陶器を小山富士夫，ガラス・金工・象牙を新規矩男（西洋美術が専門）が担当。内容が詳しく，図版も多く，参考文献，年表，王朝表までついた充実したものとなっている。

⑹ 16巻「西域・インド・イスラーム」。イスラーム部分の執筆者は深井晋司，足利惇氏，友部直，上野照夫，小林太市郎。

⑹ 22巻「オリエント（３）イスラム」。執筆は足利惇氏，村田治郎，堀内清治，羽田明，上野照夫，蒲生礼一，小林太市郎，三上次男，西村兵部，吉田光邦。イスラームの歴史，建築，装飾，書，絵画，工芸を詳しく解説している。

ルーヴル美術館などの巻で，イスラーム美術品も取り上げられている。1968年には『ライフ人間世界史』（タイム・ライフ・ブックス，翻訳本）[65]の一冊としてイスラームが取り上げられている。『原色　世界の美術』（小学館）では，イスラーム美術は，インド・西アジアを扱う13巻（1970年）のなかで少し扱われるだけである。『大系世界の美術』（学習研究社）には「イスラーム美術」（1972年，深井晋司編）の巻があり，これは1975年には４刷になるほど売れたようである。図版には，山種美術館や逸翁美術館のペルシア陶器も含まれるなど，内容も充実している。その後，『グランド世界美術』（講談社）でも「イスラムの美術」（1976年，岩村忍編集解説，石井昭・青柳正規図版解説）が単独の巻で扱われている。ここには井上靖が寄稿しており，1980年代以降のシルクロード・ブームを想起させる。『新装版　世界の文化史蹟』（講談社）の「イスラムの世界」（1978年，前嶋信次・石井昭編著）も1983年には４刷となっている。1979年の『週刊朝日百科　世界の美術』（朝日新聞社）では２回にわたりイスラーム美術・建築が取り上げられた。その執筆にも携わったイスラーム美術史家の杉村棟氏は，1978年の『イスラムの絵画』（平凡社，杉村棟訳）や1980年の『ペルシアの名陶』（平凡社）も手掛けた。このころからイスラーム美術を専門とする研究者による出版物が増える。イスラーム陶器を扱う1986年の『世界陶磁全集』（小学館）21巻には国内外の専門家が執筆している。80年代には『美術手帖』（494号，1982年）や『アッサラーム』（31号，32号，1984年）などの雑誌でイスラーム美術の特集が組まれた。1999年の『世界美術大全集　東洋編』（小学館）のイスラーム美術の巻も専門研究者によって執筆された。2000年以降は専門研究者によるイスラーム美術・建築の書籍が出されている[66]。

このように，伊東がイスラーム美術・建築を平凡社の『世界美術全集』

---

(65)　12巻が「イスラム」。著者はデズモンド・ステュアート。日本語版監修者は著名なイスラーム史研究者，嶋田襄平。

(66)　註１を参照。

で紹介したあと，しばらくの空白期間を経て，世界美術全集や関連書籍においてイスラーム美術が独立した巻として扱われるようになる。執筆者は，はじめは関連分野の研究者で，徐々にイスラーム美術・建築の専門研究者になっていく。20世紀末から21世紀初めには，現地に赴く旅行人口の増加，グローバル化の進展，インターネットの普及などにより，イスラーム圏の文化，社会，美術への関心が高まり，『トランジット』(講談社）や『ペン』（CCC メディアハウス）などの雑誌で特集された。また，近年では欧米でBoho と呼ばれる，イスラーム圏の布や工芸品をインテリアに取り入れるスタイルの流行を受け，日本でもさまざまなメディアでイスラーム圏の布ものがしばしば取り上げられている。こうした，社会における関心の高まりが，近年の日本の博物館・美術館における，イスラーム美術に関する専門的な展覧会の開催につながっていると考えられる[67]。

8．おわりに

以上見てきたように，伊東忠太はイスラーム圏を調査目的で見てまわり，イスラーム美術・建築の重要性と研究の必要性を説き，その紹介に努めた最初の人物であった。研究者向けの著述に加えて，啓明会創立十年記念展覧会（1928年）などの展覧会を企画し，『文様集成』（1911年）や『世界美術全集』（1927-1930年）の出版にかかわることで，イスラーム美術・建築についての知見を広く社会に還元した。

明治期の日本では，コンドルや辰野金吾が手掛けたイスラーム風の建築を目にすることができた。伊東もまたイスラーム風の建築を計画したり実作したりしたが，そうしたものに馴染みのない日本ではあまり評価されなかったらしく，一時的な試みにとどまっている。

---

(67)　日本とトルコとの歴史的なかかわりの深さから，イスラーム美術を含むトルコの展覧会は20世紀後半からよく開催されてきた。その最初のものが1960年の「トルコ古代美術展」で，カタログのほか，大部の『トルコ美術』（美術出版社，1960）が出版された。

伊東が書いたイスラーム美術・建築についての論考は，およそ100年も前に書かれているため，現在からみれば，個々の用語などの細かい点には不正確なところがあるものの，イスラーム美術の本質的な性質や特徴については，的確にとらえている。伊東忠太は建築史を専門とする学者であるが，建築家でもあり，また幼いころは画家を夢見たほど芸術家気質の人物であった。学位論文では，美術として建築をとらえるべきだと主張するほどに，美術を重視していた[68]。伊東がイスラーム美術・建築を的確に理解できた理由には，膨大な勉強に裏付けられた知識や，長期にわたる現地調査もあるが，何よりも芸術を見るに長けた優れた直観力があったと思われる。

もちろん，伊東のイスラーム美術・建築の理解は，彼の独創ではない。若いころから欧米で書かれた建築や美術についての書籍に学び，旅行中にも欧米の研究者による建築史の本を参照していた[69]。帰国後も欧米の研究者による美術・建築に関する書籍を数多く読んでいる[70]。また，大旅行の

---

(68) 丸山茂『日本の建築と思想―伊東忠太小論』同文書院，1996，90-94頁。これもまた，建築家の教育において芸術を重視していたコンドルの影響かもしれない。こうしたコンドルの主義についてはジョサイア・コンドル述，清水慶一訳・解題「建築学概説」『建築史学』4（1985），109-124頁，特に116頁を参照。

(69) 『伊東忠太資料目録・解説』(2003)，63，83，91頁によれば，伊東の大旅行中のフィールドノートには，Auguste Choisy, *Histoire de L'architecture*, Paris, 1899 や G.G. Zerffi, *A Manual of the Historical Development of Art*, London, 1876 のほか，James Fergusson, *History of Indian and Eastern Architecture*, London, 1876 や Alexander Cunningham, *The Ancient Geography of India*, London, 1871，Phené Spiers, *Sassanian Architecture*, 1890 などからのメモがあり，それらを参照していたことが分かる。

(70) たとえば，ハヴェルのインド建築（E.B. Havell, *Indian Architecture*, London, 1913）やヴィンセント・スミスによるインド美術史（Vincent Smith, *A History of Fine Art in India and Ceylon*, Oxford, 1911），フランツ・パシャの著したイスラーム建築（Franz Pascha, *Die Baukunst des Islam*, Darmstadt, 1887）を読んでいることが「印度建築と回教建築との交渉」から分かる。また，「奈良模様の起源に就て（上）」（『考古学雑誌』3（3）1912, 123-127頁）では，Alan S. Cole, *Ornament in European Silks*, London, 1899を紹介している。イスラーム建築を扱った上巻（H. Saladin 著）と，美術工芸を扱った下巻

最後にはヨーロッパ各地の美術館を見学しており[71]，イスラーム美術の展示を見て感銘を受けたに違いないし，それが日本での展覧会の構想につながった可能性は大いにある。

それでも，イスラーム美術・建築を実見し，その特徴と重要性を認識し，それを日本人の視点から研究する必要性を唱え，研究者および一般の人びとに広く紹介した最初の日本人としての功績は深く記憶されるべきである。また，飛鳥文様を論じながらイスラーム文様にまで考察を広げるスケールの大きさや[72]，日本を基点として世界の建築を見る姿勢も[73]，伊東を際立たせている。イスラーム圏に関心を持つ日本人が増え，一般向きの手軽な書籍などでの紹介が増えてくるのは20世紀末以降であった。傑出した学者であり建築家であった伊東忠太は，100年ほど時代を先取りした，イスラーム美術・建築の先駆的な紹介者だったのである。

（Gaston Migeon 著）からなる *Manual d'Art Musulman*（Pairs, 1907）などの，欧米で出版されたイスラーム美術・建築の書籍に目を通していただろう。

⑺1　大旅行の最後に，ギリシア，イタリア，ドイツ，フランス，イギリスの各地およびニューヨークに滞在し，ルーヴル美術館やサウス・ケンジントン博物館，大英博物館をはじめとする主要な美術館・博物館も見学している。『伊東忠太資料目録・解説』（2003），92-93頁を参照。

⑺2　伊東忠太『法隆寺』（創元社，1941），191-192頁においてイスラームの装飾文様を紹介し，「古今東西に亙って文様界の大王たる回教文様の研究は，この際甚だ必要であると思ふ」と述べている。

⑺3　伊東忠太「東洋建築の系統及其の美的価値」『早稲田文学』２（３）1906，70-80頁，特に72頁および「東洋建築ノ系統及其美的価値」『日本美術協会報告第一次』１（185）1906，26頁。